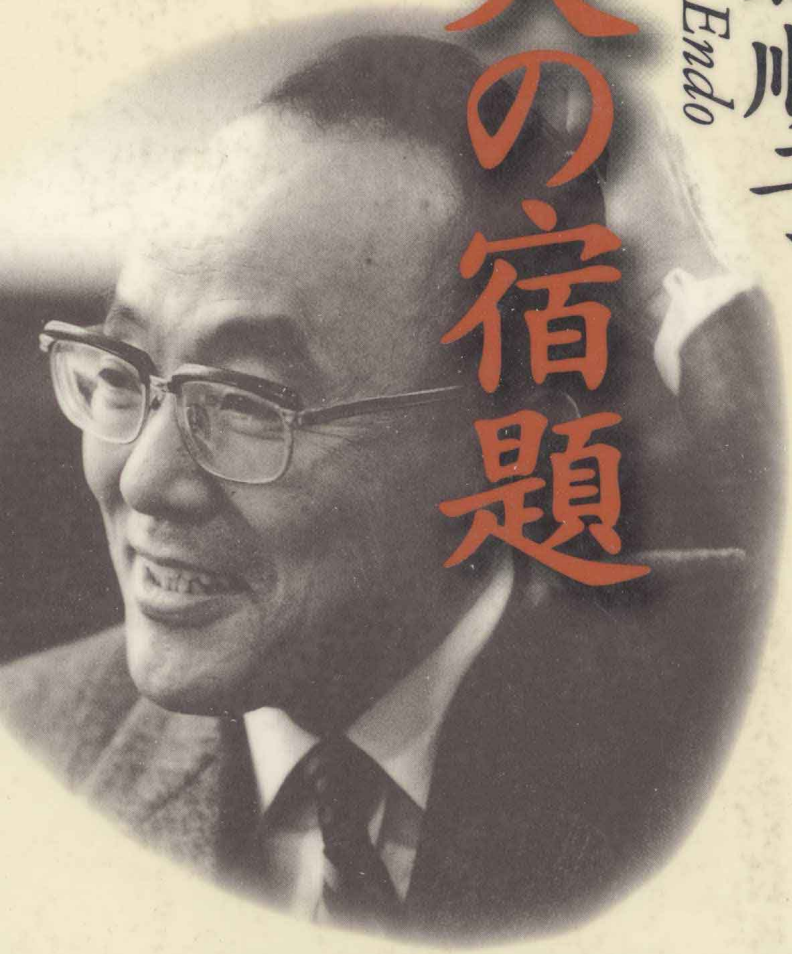
遠藤順子

Junko Endo

夫の宿題



夫の看取り

遠藤順子

PHP

〈著者略歴〉

遠藤順子（えんどう　じゅんこ）

昭和２年、実業家岡田幸三郎の長女として東京に生まれる。
慶応義塾大学仏文科卒。在学中に、遠藤周作と出逢う。昭和30年、結婚。翌年、長男龍之介を出産する。

夫の宿題

1998年７月23日　第１版第１刷発行
1998年８月12日　第１版第３刷発行

著　者　遠藤順子
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102-8331　千代田区三番町3番地10
第三出版部　☎03-3239-6256
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

©Junko Endo 1998 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。

ISBN4-569-60169-3

夫の宿題——目次

第一章　今度もきっと、治してあげる

予期せぬ腎臓の悪化……9
医者を選ぶのも寿命のうち……13
まだ麻酔が効いていない！……17
二人で、どんな病気ものり切ってきた……21
腹膜透析の過酷な日々……24
腎臓を買ってまで長生きしたくはない……29
『ヨブ記』を生き抜く……32
孫娘が救ってくれた薬害の苦しみ……36
無駄な苦痛や屈辱は与えない……40

第二章　夫・遠藤周作という人

僕は明後日フランスへ行きます……45
パチンコ屋での待ちあわせデート……48

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死の影の谷を歩む……51
夜中の夫婦げんか……54
『沈黙』と紙の踏絵……59
人生はじゅうたんを織るかのごとく……63
遠藤周作ファン第一号は遠藤の母……66
芥川賞はとったけれど……71
狐狸庵山人になった理由……75
物書きのゆずれない一線……78
私は踏み石になろう……82
似ない者夫婦……86
母親役もこなすよき父親……89
銀婚式のプレゼント……92
こだわりの食通……94
遠藤食堂のあれこれ……98
奈良・長崎・そして琵琶湖にて……101

司馬遼太郎さんとの京都ランデブー……105

第三章　人生を横切る宝もの

若き文士を育んだ三田文学……111
『真昼のにおい』から『沈黙』へ……115
エルサレム巡礼……120
奇想天外な素人劇団・樹座……125
サド城での命拾い……129
「深い河」ベナレスの河畔で……134
マザー・テレサからの手紙……138
ローマでパウロ六世に謁見……143
アウシュビッツへの旅……146
キリストよ、哀れみたまえ……150

第四章　魂の交わり――心あたたかな病院

友ちゃんの癌……157
君は一人じゃないんだよ……159
医療問題への取り組みを決意する……162
安らかな昇天を祈って……165
医者の仕事は人の魂と交わること……168
セカンド・オピニオンを聞きやすいシステム作り……173
脳死はやはり人の死ではない……177

第五章　また逢う日まで

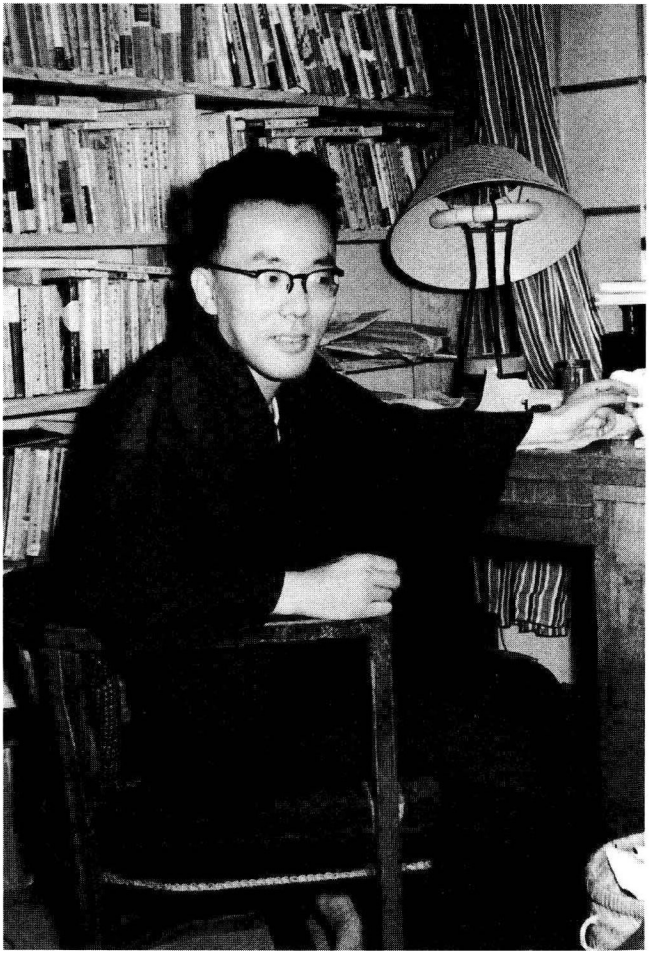
愛する人が迎えにくる……183
夫婦は人生の同伴者……187
光の中から歓喜のメッセージ……190
「復活」を確信した一日……194

ずっとそばにいてくださった方……199
美しい日本とキリスト教……203
ローマ製の眼鏡をはずして……207
このキリストならばわかる……212
遠藤周作記念館の設立……218
すべての犠牲者への追悼ミサ……222
あの世への引越し前……227
夫からの宿題……230
死は終わりではない——あとがきにかえて

装幀——川上成夫
装幀写真——稲井　勲

第一章

今度もきっと、治してあげる



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

予期せぬ腎臓の悪化

主人は常々「不幸って奴は、突然、人のうしろから切りつけてくるんだ！」と言っておりましたが、今回もその予言は不幸にも見事に的中してしまいました。

平成四年の九月末にK先生からかかってきた一本の電話は、わが家の運命と生活をがらりと変えることになりました。K先生は、七年間毎月、採血にみえて主人の健康管理をしてくださっていた方です。

前月の八月にK先生がいつもの健康診断にみえた時には、「肝臓のGOT・GPTなどの数値も大変よくなっているし、糖尿病の数値も、これまた、おどろくほどよくなってます」と言われました。「グッドコントロールです」と嬉しい言葉を言いおいてお帰りになったばかりでした。K先生が帰られてから、私は主人の手をとって、

「肝臓と糖尿という二つの難病を、ともかく二人で何とか克服したわね」

と喜び合いました。ですから、翌月の九月にK先生から、腎臓の数値が大変悪いので再

検査したいという電話を頂いた時には、文字通り青天の霹靂でした。
お恥ずかしい話ですが、いきなり腎臓とかクレアチニン（腎臓から排泄される老廃物の一種）とか言われても、腎臓が体の一体どの辺にあるのか、人体でどのような機能を果たすものなのか、当時私はあまり知識がありませんでした。
ちょうどその翌日、主人は琵琶湖の畔りで講演を頼まれておりましたので、私もついて参りました。
夜、東京駅まで帰ってくるなり、二人で八重洲ブックセンターへとびこんで、腎臓に関する本を山ほど買って帰宅したことを、今でも鮮明に覚えております。
それまで主人は、長年、糖尿病でしたから、食餌療法は何年もしていました。はじめに一二〇〇カロリーからスタートして一四〇〇カロリーになった時には、我々台所勢はほっとしたものです。
しかし、今度は肝臓が悪くなって、K先生に主治医をお願いするようになってから、肝臓病には何より、高カロリー、高タンパクな食事をということで、一八〇〇カロリーと決められました。持点が一八〇〇カロリーあれば、美味しい料理を何でも食べさせてあげられると思う一方で、糖尿では低カロリーにと言われ、今度は肝臓で高カロリーにと言われ、困り果てました。

そのシーソーゲームのような食餌療法のバランスを、一体、どの辺りでとっていったらいいかが悩みの種でした。

主人も用心深い人ですから、

「K先生は一八〇〇カロリーとおっしゃるけれど、まあ、用心のために一六〇〇カロリーにしておいてくれよ」と申しました。

私もそのほうが安心だからと思い、K先生のご指示よりは二〇〇カロリー少ない一六〇〇カロリーで食事を作っておりました。ですから、カロリー計算にはわりと自信をもっておりましたし、八月にK先生からグッドコントロールと言われました時にも「いいはずだろう」と思っていたのです。

ところが、八重洲ブックセンターで買ってきた『腎臓の食餌療法』という本を開いてびっくりいたしました。そこには、一日に食べられるタンパク質の量が図で示してありました。

たとえば、中ぐらいの鯵（あじ）一匹のちょうど四分の一くらいが許容量で、あと四分の三には、黒い斜線が引いてありました。今でもあの図柄が目に浮かびます。それまで好きで毎日のように食べていました豆腐も枝豆も、四角に切った豆腐二片、枝豆もグラムを計ってという具合になりました。

今までやってきた糖尿病の食餌療法の難度が、かりに一としますと、腎臓病の食餌療法は十ぐらいの難度があると言えるでしょう。

クレアチニンの値4・3と言われました時には、クレアチニンとは何のことか、4・3ということは如何なる意味があるのかわかりませんでしたけれど、腎臓の本をさまざま読んで知識をつめこみました。

クレアチニン3以上は腎不全を意味することも、1を越えた段階で手を打たなければ、いずれは透析(とうせき)になるということもわかりました。主人の場合は、残念ながら発見された時にはすでに手おくれで、透析は時間の問題ということも理解せざるを得ませんでした。

それでも何とかして透析をさけさせたい。いきなりふりかかってきた火の粉の中から、何とか主人を救いださねばと、夜中まできびしいカロリー制限の献立の計算をしました。

少しでも好きなものを、少しでも美味しいと思ってくれるものをと、必死で許容量を計算する毎日がつづきました。主人は元々、体が弱かったこともあって、人一倍、健康には用心をしておりました。主人にしてみれば、毎月、採血をして検査して頂いていたのにどうしてだと、どうして手おくれになるまでほっておいたのだ、あまりにも無責任じゃあないかというやり切れない気分であったと思います。

医者を選ぶのも寿命のうち

A病院の学長先生は腎臓病の第一人者で、かねてより主人も存じ上げておりましたので、相談に伺い、十月末に食餌療法に少しずつ身体をならすための教育入院を一カ月ほどすることになりました。

今まで飲んでいた薬を全部もってきてほしいということで、入院の時に持参いたしました。ところが、睡眠薬としてK先生から頂いていた薬は、腎臓に重篤（じゅうとく）な障害を及ぼす薬だとA病院の担当の若い先生から言われ、呆然としてしまいました。さらに、糖尿病を患っていて急に糖尿の数値が良くなった場合は、腎臓が悪化しているということは内科医の常識ですよ、とも言われました。

その直後、「週刊Y」に副作用が強いために厚生省が許可を取消した薬の一覧表が出ていて、そのリストの中に主人が服用していた薬の名も載っていました。確かに、腎臓に重篤な障害を及ぼすと書いてありました。

A病院の所見については、主人からK先生にも電話で伝えましたが、「見解の相違ですな！」の一言っ切りで、その後は、主人が亡くなるまでの三年半、K先生からは電話一本、見舞いの葉書一枚も届きませんでした。

主人が三十七、八年前に結核で慶応病院に入っておりました頃とは違って、今はどの病院でも循環器内科とか、神経内科とか、内科も種々に分かれていることは、私も承知しておりましたが、肝臓の専門でいらっしゃる内科の先生が、まさかこれほど内科の他の分野の病気について勉強不足とは思っておりませんでした。

医者を選ぶのも寿命のうちと、世間でよく言われておりますが、今のように人間の体を勝手に分類し、○○内科、○○内科と、段々と専門が細分化されてしまうと、自分の専門以外のことは眼中になくて注意不足になってしまうのでしょう。それにもかかわらず我々患者の側は、内科の先生といえば、内科のことは一応、何でもわかっていると思ってしまうのです。

主人は若い時、結核を手術した後、慶応の結核内科出身で、川崎で開業しておられた熊谷敬先生にずっと診て頂いておりました。人間的にも技術的にも非常に尊敬していまして、若い頃から三十五、六年にわたって、家族ぐるみのお付合いでした。

その先生が、突然、亡くなられましてからは、ことホームドクターについては、どうも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com